統合失調症で退職後、
５年の空白期間に就労支援を組み合わせて活用し
再就職したケースについて

○黒木 順平（たまフレ！　施設長）

１　たまフレ！とは？

障がい者就労支援たまフレ！（以下「たまフレ！」という。）は、神奈川県川崎市多摩区に所在する、多機能型の就労支援施設である。たまふれあいグループ傘下の医療法人メディカルクラスタが運営し、就労移行支援（以下「就労移行」という。）、自立訓練（生活訓練）、就労継続支援B型（以下「B型」という。）の３つのサービスを展開している。

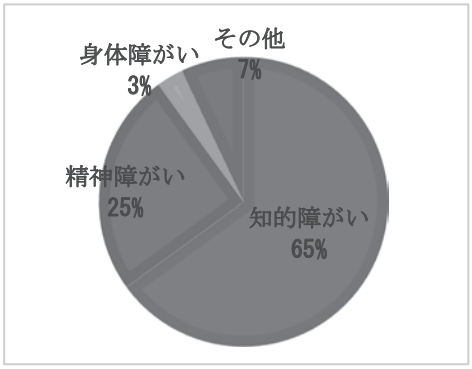

図１　たまフレ！ 利用者の障がい種別

利用者は、特別支援学校を卒業した知的障がいの方が約７割、近隣の精神科病院から紹介を受けた精神障がいの方が約2.5割である。加えて、身体障がい者手帳を所持している方や介護保険を利用せずにB型を継続している70代の利用者など、多様な背景を持つ方が在籍しており、地域に根差した幅広いニーズに対応する就労支援を行っている。

施設内では軽作業を中心とした活動を行うほか、近隣の商店会に加入し店舗の開店前作業を受託するなど地域と連携した取り組みも実施している。また、ふれあいグループの関連会社での洗車・洗濯業務など、施設外での実践的な作業機会の提供も特徴である。毎年６、７名が近隣の企業へ就職し、半年以上の定着率は９割を超えている。

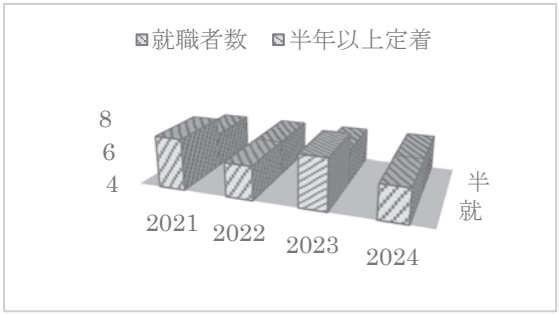

図２　たまフレ！ 就職者数と定着率

２　ケース概要～基本情報～

Aさんは川崎市内に住む30代前半の男性で、両親との３人暮らしである。父は会社員、母は専業主婦で家庭の経済状況は比較的安定している。家族仲は良好である。

診断は統合失調症であり、発症当初は自分を責めるような幻聴（「お前はダメな人間だ」「周りに迷惑をかけている」等）の陽性症状があったが、服薬により軽減した。むしろ陰性症状が顕著で、生活全般への意欲が著しく低下し、日常生活が困難な状態となっていた。定期通院を継続しながら、精神科デイケアとたまフレ！の就労支援を併用し、徐々に症状が安定、地元の企業Dの障がい者雇用枠にて社内SEとして再就職を果たしている。

３　生育歴と進路

Aさんは小・中学校を公立で過ごし、成績優秀かつ友人関係にも恵まれた一般的な少年期であった。スポーツも球技を中心に取り組み心身ともに健康であった。

両親の高い期待もあり高校進学後は学業に励み、東京都内の私立大学Bに進学。サークル活動にも積極的に参加し単位も計画的に取得、順調な学生生活を送った。就職活動には多少苦戦したものの、IT系企業への入社が決まり、ここまで大きなつまずきのない安定した進路を歩んできた。

４　ITエンジニアの落とし穴

ITエンジニアは専門性が高く将来性のある職業のイメージが強い。大学B卒の経歴からもAさんには順調なキャリアが期待されていた。実際、Aさんは地頭の良さもありプログラミング言語を独学で習得、入社前から業務スキルを高める努力をしていた。

しかし現実は異なっていた。入社後の研修を経て客先常駐の業務が割り当てられ、多くの新卒エンジニアが思い描く自社開発の職場ではなく、下請け構造の末端に近い小規模プロジェクトに配属された。慢性的な人手不足と納期遅延で過重労働が常態化、指導役の上司は高圧的で業務説明も不十分であった。

Aさんは謙虚で責任感が強く、途中で投げ出すことなく懸命に業務に取り組んだ。しかし環境は厳しく、上司からの抽象的指示と報告・相談のタイミングが取れない中、努力して成果を出しても否定される理不尽な状況が続いた。

５　忍び寄る病魔

勤務から３か月、業務に慣れ即戦力として評価されていたが、慢性的ストレスと睡眠不足から疲労が蓄積し集中力や判断力が低下した。ある時期から「お前はダメな人間だ」「周りに迷惑をかけている」などの声が頭に聞こえ戸惑いを覚えた。気分の落ち込みが激しくなり朝起きられず出勤困難に。無力感と無気力感に襲われ医師の診断で３か月の休職、その後精神科病院Cに入院した。

６　入院と治療

精神科病院C入院中、薬物療法で幻聴などの陽性症状は改善したものの、「社会に戻る」というプレッシャーから自信を失い、外出もままならない日々が続いた。職場復帰を模索したが、主治医と家族との相談の結果、退職を決断。入院から半年後、自宅に戻った。

７　社会復帰への一歩　リハビリテーション

自宅療養中は両親の期待を感じつつも、負担に思うこともあった。様々な葛藤を抱えながらも、医師の勧めを受けて意を決し、C病院のデイケアに参加。書道や茶道、陶芸などの創作活動に取り組み、徐々に気力を取り戻していった。

ものづくりの楽しさの中でかつてのプログラミングへの情熱や創造性が蘇った。しかしデイケアは社会復帰訓練として限界があり次のステップを模索した。

８　たまフレ！ との出会い～訓練の日々～

その後デイケアの紹介で「たまフレ！」を知る。プログラミングはなかったが、清掃や軽作業など社会に近い活動に可能性を感じた。まずB型を利用し、準備が整えば就労移行を受ける計画を立てた。

利用者は就職を目指し、規律や責任感が強い。知的障がいのある利用者とのやりとりでは、わかりやすく伝える工夫を学び、報告・相談力を高めた。スタッフから肯定的な評価を受け、職場コミュニケーションに自信を得た。

その後デイケア週２日、B型週３日を利用し、生活リズムと自信を取り戻した。ただ陰性症状は安定せず、通院・服薬を継続しながら気分の落ち込みもあった。気づけば５年が経過していた。

９　伴走型の就職活動

本人・家族・支援者とも再就職に触れなくなり、淡々とした生活が続いていた。そんな中、新任施設長の黒木は職歴やスキルに注目し、年単位の就労経験やB大学での実績から能力を見込んで、福祉事業者リサーチを課題として与えた。エンジニア職ではなくマーケティング的な課題ではあったが、要件定義のセンスや主体的な相談を通じて仕事の感覚を取り戻した。報告・相談を重ねる中で精度の高いリストを作成し、PCスキルと即戦力性を示した。これを根拠に就労移行スタッフとともに応募準備を進めた。

10　障がい者枠での「お試し就労」

家族の心配をよそにAさんの再就職意欲は高まり、精神保健福祉手帳を取得し障がい者枠で合理的配慮を受けることになった。重視したのは「報告・相談時間の確保」「コンプライアンス」「安定した環境」であり、実習先は自然にこれを満たしていた。

お試し就労で高評価を得て１か月で内定を獲得。休憩を取りつつ働け、上司との報連相も円滑だった。就労移行による定着支援を受けながら短時間から始め、正社員を目指すキャリアプランも描けた。

11　定着支援

実際に働き始めてからも、上司とは良好な関係を築き、信頼を得ている。社内システム構築やデータ入力業務に従事している。気分の落ち込みはあるものの、上司から具体的なアドバイスがあり、移行支援スタッフもこまめに連絡を取り不安解消に努めている。以前とは異なり、報告・相談は「より良い成果を残すため」という明確な目的を持って行われるため、上司も時間を割いて対応している。少し神経質な面はあるが、細やかな気配りができるAさんを上司は頼りにしているようだ。

順調にステップを踏んでおり、定期通院時には主治医に就労状況を報告し、継続を後押ししてもらっている。今後は仕事を安定的に続け、フルタイムや正社員を目指す計画である。

あとがき

現代社会は多様なストレスが存在し回避困難である。しかしコンプライアンス重視や組織ガバナンスを強化する企業は業績向上と離職率低下を実現している。そのような職場を見極め、障がいに応じた対策と適切な治療、周囲の支援を組み合わせることで本人の力が発揮される。支援者には根拠に基づく後押しと環境整備能力が求められるが、本ケースではチームとして良好に機能した。今後も一人でも多くの統合失調症患者が症状と共に働ける支援を目指す。

【連絡先】
黒木 順平
障がい者就労支援 たまフレ！
e-mail：tamafure@tama-fc.com